

## 「身体の履歴」を問うことの意義

Signification of Questing for “History of Personal Body”

新 保 淳  
Atsushi SHIMBO

（平成14年10月7日受理）

### Abstract

Our body are formed and accumulate a wide variety of personal experiences as a result of being, without interruption, in our natural environment. “History of personal body” arises in there. However, “history of personal body” in each of students were not utilized by the teacher in school too much.

The purpose of this study was to clarify the signification of questing for “history of personal body”.

The results are summarized as follows :

1) “History of personal body” comes up with the interaction both of the allocation of body and the history of space. The idea is that both of them have culture and history. And individual characteristics of students are well represented by “history of personal body”.

2) The actions of process of creating value are formed by “history of personal body”. Each of actions accumulates each of judgments. That is the history through the allocation of body.

The teachers have to concern with using “history of personal body” in each of students. The quality of class in physical education will improve.

### 1. 序論

我々のこの身体は、どのようなプロセスを経て現在に至っているのだろうか。この素朴な疑問に対する形態面から一つの解答としては、骨格、筋、神経に代表される運動器、脳を座とする感覚器、胃、腸、肝臓、膵臓などの消化器官、肺や気道などの呼吸器官、心臓、血管、血液などの循環器官、腎臓、膀胱などの排泄器官、そして生殖器官等々の我々の身体を構成する細胞に飲食物等からの諸栄養素が供給されることによって成長し、現在に至っているというプロセスがあげられる。一方、これを機能面から解答するならば、我々の身体機能は、「脳幹－脊髄系」、「大脳辺縁系」、「新皮質系」という三つ

の異なる中枢によって支配されているわけであるが、この中でも誕生以来、我々の身体への意図的な働きかけによって変容しうるのは、新皮質系である。この新皮質系に働きかけることで、様々な身体運動、例えば、「立つ」、「歩く」、「走る」、「跳ぶ」、「投げる」といった基本的な運動を始めとして、日常的な挙措動作に係わる運動、作業労働的な運動、そして舞踊や競技スポーツに代表される高度に技術的な運動を実践しうる「可能な身体」として現在に至っているのである（佐藤、pp.207-209）。またこれらをまとめて、誕生から現在の我々の身体を時間軸を中心に考察するならば、それは過去における諸栄養素の供給と様々な運動技能の獲得という「履歴」を現時点に具現化し、その身体が未来に向けて在ると表現することも可能であろう。

もちろん我々の身体は、誰もが全く同一の栄養素や運動技能を享受することによって、ここに存在しているので無いことは、明白な事実である。桑子是这样した我々の身体について「人間は環境のなかでいろいろな事物やひとびとと関係をむすびながら人生を送る。ひとりの人間が事物やひとびととむすぶ関係を空間的に捉えたものが『身体の配置』である」（桑子、感性の哲学、p.191）と述べ、また我々が関係を持つその「空間」に関しても「履歴」をもった空間であることを看取している。

これらのことから我々の身体は、同レベル程度の身体を持って生まれながらも、後にどのような「身体の配置」がなされ、またどのような「空間の履歴」に投げ込まれるかによって、まったく独自の「身体の配置と履歴」を持って現在に至っている、という解答の仕方も在りえるであろう。

しかしながら、個々人が「身体の履歴」を持つことについては異論がないにしても、それを問うこと自体、我々にとってどんな意義を持つのであろうか。本研究においては、この「身体の履歴」を問うことの意義について検討を加えることから、それが例えば学校体育においてどのような意味を持つのかについて視点を拡大し、児童・生徒の指導のための一助にならんとすることをねらいとするものである。

## 2. 研究の目的と方法

まず、「身体の履歴」とはどのような事柄を意味しているのかについて、桑子のいくつかの文献から「身体の配置」あるいは「空間の履歴」という概念について検討を加え（よって、以下、桑子の文章の引用は、書名のみを表記する）、次に「身体の履歴」の事例として筆者自らの身体の個人史を描くことで、身体がどのような環境的影響を受けつつ行為することで、自らの身体に対する価値形成をなしてきたのかについて、個人レベルで検証してみることにする。そこから、学校体育において一人一人の児童・生徒の「身体の履歴」を問うことが、指導するうえでどのような意義を持つのかについて明らかにしたいと考える。

## 3. 「身体の配置」と「空間の履歴」

ひとの人生の豊かさとは、ひとの履歴の豊かさであり、それはそのひとの配置によって与えられる。配置のなかに多くの意味があり、解釈があることによって、ひとは豊かな空間での配置をもつ豊かな存在となる。逆の意味で、貧しい空間では、ひとの配置もまた貧困である。だから、配置の内容の豊かさこそ、豊かな空間の指標である。豊かな空間と豊かな心とは不可分な関係にある。（環境の哲学、p.31）

この文章のみから桑子の主張を端的に言うてしまうならば、「身体の配置」とは、ひとりひとりの人間の個性の源泉であり、それが豊かなものであったかなかったか、あるいは豊かなものにこれからす

るかしないかは、「空間の履歴」によって影響を受ける、と解釈することが可能であろう。

しかしながら、我々の「生」が豊かであったかどうかを振り返るとき、単にこれだけの説明によって、過去を判断するだけの視点が与えられたとすることは出来ないであろう。個性の源泉としての「身体の配置」、また、我々の「生」の豊かさを左右するという「空間の履歴」について桑子が提示する概念は、どのような内包を持った世界であろうか。以下、この二つの主たるキーワードについて理解を深めていくことにする。

まず「わたし」の存在について桑子は、以下のように述べている。

わたしはこの身体と身体の配置される状況との統合である。この身体の配置された空間には履歴がある。その空間に配置をもつさまざまな事物もまた履歴をもっている。もちろんわたしも履歴をもつが、多くの事物は、わたしの履歴よりも古い履歴をもつ。古い履歴をもつ事物と現在の空間を共有しながら、わたしは存在している。(環境の哲学、pp.30 - 31)

この文章から「身体の配置」と「空間の履歴」は、最終的に別々に解釈することは不可能であることが理解できる。しかしながらあえて本節では、まずそれぞれを別々に解釈することから始めることにする。それは、まさに桑子がこの二つの概念を統合するまでに至った思考のプロセスについて、桑子とともに辿ることを意味するからである。

### 3-1. 身体の配置

桑子の「身体の配置」という概念は、広大な射程（外延）を持つ。例えば桑子は、これを環境問題に援用して以下のように述べている。

環境問題は、直接的に人間にかかわるものとしては、生命と健康の問題としてとらえることができる。(中略)つまり環境の問題は、人間がなによりも身体的な存在であること、有害物質が環境中を移動すること、そして、身体がどのような配置をもつかということと切り離すことができない。(環境の哲学、p.107)

すなわち環境問題が提起するのは、単に有害物質や温暖化、環境ホルモンなどが自然環境を悪化させているという自然界単独の問題なのではなく、「どれも環境中の物質の状態と身体の空間的な条件」(環境の哲学、p.107)を基礎とする両者の相互作用における問題であり、それ故に人間にとっての生命と健康の問題となりうると桑子は捉えている。この環境問題への援用は「わたしたちは、宇宙のうちに身体を配置され、存在するものとふれあいながら生まれ、動き、止まり、死んでゆく」(空間と身体、p.41)という考察からも理解しうるところである。

このような「身体の配置」という概念を思考する桑子の始動点は、以下の文章によって理解することができよう。

わたしは心身の問題を捉えるにも、まず身体をやわらかいものとして把握しなければならないと思います。身体をやわらかさは、やわらかいものとの関係によってはじめて成立します。やわらかい対象とやわらかさの感覚は、ふれるという行為と切り離すことができません。やわらかいものとは、ふれるという行為によって容易に形を変えるものです。形の変化に対する身体的な知覚がやわらかさの知覚であり、同時に身体の変化の知覚でもあります。この意味で、身体を捉えるには、環境に対する人間の行為の理解を必要とします。このとき、行為は行為者の身体がどのような状況に置

かれているか、状況と身体とはどのような配置にあるかということを理解しなければなりません。環境と身体との関係を論じるための行為論は、状況と配置の概念を含む行為論でなければならないのです。わたしは、このような「配置」の概念によって、人間と環境と行為の関係を把握しようと試みました。(気相の哲学、pp.5-6)

そしてこの試みを導くべき先導者として桑子がまず選んだのは「行為の状況とは、環境のうちに身体のもつ配置の関係であり、この環境は、人間の身体を構成する物質的な要素との連続性によって特徴づけられる」(気相の哲学、p.8)とする朱子学であった。というのも朱子学は、「環境と身体を媒介とする行為の評価」の理論であり、「自然と人間の連続的関係を基底におく」理論だからである。

この始動点で注目すべきことは、「やわらかな身体」という言葉であろう。「やわらかさは、皮膚の感覚によって知ることのできる」ものであり、逆に「世界がかたくなっていくということは、同時に、やわらかいものを知る感性が失われていくことを意味」(気相の哲学、p.3)する。ここで「やわらかさ」を強調するのは、現代社会がコンクリートやブロック等によって「ものを固める」方向に進んでいることに対するアンチテーゼでもある。この「かたさ」は建築物だけではない。現代文明の思想的発端である西洋の哲学は、心をソフトなものとして捉える一方で、身体をハードなものとして捉えてきたと桑子は看取する。「やわらかい身体は、その皮膚感覚によって、世界のかたいものとやわらかいものを見分け、柔軟にはたらきかけることによってその生を維持」するのであり、もし「身体がやわらかさを失うならば、わたしたちは、自分のしていることを知らないまま、世界をますますかたくするようにはたらきかけることになる」(気相の哲学、p.4)と述べているように、「やわらかな身体」は、自然界に対して重要な機能を持つことが理解できる。そこで、この「やわらかな身体」とはどのような事を意味するのかについて桑子の論を追っていくことにする。

桑子が「やわらかな身体」の拠り所とするのは、朱子学の祖である朱熹が11世紀の北宋の哲学者の言葉を集めた「近思録」における張載の考え方にある。以下、桑子による張載の解釈を何箇所か引用してみることにする。

張載にとっても世界は生命現象で充実した時空です。この時空のはたらきによって、個々の生命は本質を与えられています。生命の本質は「性」ということばで表現されます。個々の生命は、他の生命と身体において連続しているものと理解されています。ここで「エネルギー」ということばを用いてよいなら、すべての生命は、さまざまなエネルギー状態にある気によって構成されており、これは人間でも他の生命でも同一であるということができでしょう。どのような生命も孤立し閉じた系ではなく、環境と気の交換を、つまりエネルギーと物質の交換を行いながらその恒常性を維持しているのです。(気相の哲学、p.54)

物とわたしの身体、宇宙とわたしが連続的であり一体であるとするこのような主張は、身体と環境との根源的な連続性を説くものとして注目に値します。身体と環境との相関のうちに人間の基礎をみようとする思想は、物質相のうち、気相と液相に生命活動の根源をみえています。(中略)身体はハードではなく、やわらかいものとして、つまり気相と液相にある物質を基礎として成立しているわけです。身体と環境のうちに人間と世界の根拠をみるこのような発想は、やわらかい身体論ということができでしょう。(気相の哲学、p.56)

ここで述べられる身体の「やわらかさ」は、西洋哲学における「心身二元論」、すなわち「心」をソフトなもの非物質的なものとして捉え、一方で「身体」をハードなもの物質的なものとして捉えるのに対して、朱熹の哲学では、「身体にも心にも物質的な側面と非物質的な側面とを認める」(気相の

哲学、p.24) ことを前提として導き出されている。つまり、身体もソフトな一面をもっているということである。またこの「やわらかさ」は、世界を眺める視点にも影響を与える。「世界がここからこのように見えるから世界はこうなのだ、と断定することではなくて、この身体が世界のここにあるから、世界はこのように見えるのだ。(気相の哲学、p.93)」というように、我々は、固定的な視点、すなわち我々の視覚や聴覚そして臭覚といった感覚器官が身体の前面にあることから、そこから見える世界のみが絶対的なものであると思込みがちであるが、「空間が自己の配置との関係で把握されるような、そうした機能的意味づけ」(気相の哲学、p.93) が可能な「やわらかさ」を持つことで、世界に対する解釈そのものも柔軟になるのである。こうした視点が「科学」という人為による自然支配を可能と考える今日の世界観とは異質な視点であることは、誰もが感ずるところであろう。桑子は、「やわらかな身体」とは「柔軟に世界を知覚し行為を行う身体」であるとし、しかもその知覚の始点として身体が重要な役割をもつことを強調しているのである。

以上のことをふまえて、桑子は「身体の配置」という概念について、以下のように述べている。

人間は環境のなかでいろいろな事物やひとびとと関係をむすびながら人生を送る。ひとりの人間が事物やひとびととむすぶ関係を空間的に捉えたものが「身体の配置」という概念である。配置とは空間的に捉えられた事物と身体的自己との関係であるといってもよい。(感性の哲学、p.191)

すなわち柔軟に世界を知覚し行為を行う「やわらかな身体」をもった「ひとりひとりの人間がこの地球上のある地点に空間的広がりをもって配置され」ており「その配置を決定しているのは、身体がこの空間で他の人間や事物、空、大気、水、大地とどのような全体的な関係にあるかということ」(環境の哲学、p.108) であると言うように、「身体の配置」とは、我々の周囲に具体的に存在する事物との相互関係を意味している。そしてその相互関係を知覚しうるためには「やわらかな身体」を必要とするのである。

さらに言うならば「身体」を包み込んでいるのが「空間」なのである。では我々を包み込む「空間」、あるいはその空間的配置のなかで「履歴」を積むとはいかなる事を意味するのかについて、次に見ていくことにする。

### 3-2. 空間の履歴

「空間の履歴」に対して桑子は、「人間と環境のかかわりを理解する視点に、時間を組み込むという課題を考えつづけた結果として到達した概念である」(感性の哲学、p.195) と述べ、その「空間の履歴」という概念に対して以下のような説明を加えている。

わたしがかわる空間とは、身体の配置された空間であり、この空間でのこの身体こそ「わたしの身体」である。そしてこの身体に属する指によって「これ」と指されるのがわたしである。わたしはこの身体と身体とが配置された空間から逃れることができない。わたしはこの身体と身体の配置される状況との統合である。この身体の配置された空間には履歴がある。その空間に配置をもつさまざまな事物もまた履歴をもっている。もちろんわたしも履歴をもつが、多くの事物は、わたしの履歴よりも古い履歴をもつ。古い履歴をもつ事物と現在の空間を共有しながら、わたしは存在している。(環境の哲学、pp.30 - 31)

この桑子の「空間の履歴」の説明から読みとれることは、まず「わたし」という「身体」が存在す

る「空間」は、単に我々の周囲を「今」「現在」取り巻くだけのものではないということである。

「空間の履歴」とは、ある空間でどんなことが起こったか、そしてどんなものとして考えられたかということの蓄積、いわば空間の意味の蓄積である。その意味には、宗教的なもの、思想的なもの、そのほかいろいろなものがある。どんな空間にも出来事やひとびとのいとなみ、思想、願望が染み込んでいる。(西行の風景、p.103)

沈黙を守っているようにしか映らない我々の周囲に存在するあらゆるものが、そこに意味を持って存在しているのである。そしてその環境あるいは事物等を意識するしないにかかわらず、我々の身体に対する働きかけを与えているとも言えよう。

現代に生きる我々の身体は、そうした「履歴」を持った「空間」として意識することはほとんどないであろう。まさに「やわらかな身体」を失っているのである。しかしながら、過去において日本人は、

西行をはじめとする「新古今和歌集」の歌人たちは、かれらの身体のおかれた空間に出現する風景を、かれらの全感覚をもって受けとめた。そのようにして受けとめられるものこそが「風景」であった。言い換えれば、風景とは、「身体配置へと知覚的に出現する空間の相貌」である。その空間は、その空間を意味づける文化の履歴をもつ。と同時に、風景は、視覚ばかりでなく、聴覚、触覚、あるいは臭覚など全感覚によって捉えうるような知覚される空間の相貌である。その空間には重要な要素として、風があり、闇があり、静寂があった。(西行の風景、p.121)

というように、まさに「やわらかな身体」でもって受け止めていたのである。その違いはどこにあるのであろうか。本節の冒頭でも引用したように「ひとの人生の豊かさとは、ひとの履歴の豊かさであり、それはそのひとの配置によって与えられる。配置のなかに多くの意味があり、解釈があることによって、ひとは豊かな空間での配置をもつ豊かな存在となる。逆の意味で、貧しい空間では、ひとの配置もまた貧困である」(環境の哲学、p.31)という桑子の解釈からするならば、我々が現代に生きるということそのものが、ハードな環境(建築物、道路等の人工物)を作り出した環境の中で、まさにハードな身体として存在しているのであり、またそのハードな環境(「貧しい空間」との相互作用から、さらに「やわらかな身体」の側面を消失させているということができよう。

自己の配置が空間のなかで積み上げられるとき、それを「履歴」と呼ぶことができる。自己の身体配置は、その身体のもつ履歴から切り離すことができない。この履歴は、自己の配置が時間のなかにあることによって蓄積されてゆく。と同時に、履歴が蓄積されるとき、わたしを含む空間もまた履歴を蓄積していくであろう。じつは、その空間の履歴のなかでこそ、自己の履歴が蓄積されるのである。(西行の風景、p.235)

ここで述べられる「履歴」の持つ重要性から、まさにこれから生きようとする子ども達に対する多大な影響を読みとることができる。本来「やわらかな身体」として生れ落ちたにもかかわらず、そこには「モノ」は豊かでありながら、それでいて「心」の豊かさに欠ける「貧しい空間」のみが存在し、そしてそこに身体が「配置」され、それが成長という時間の経過によって「履歴」が蓄積されていくとするならば、我々にとってこれまでに経験したことのない「身体」が作り上げられる可能性を秘めているとも言えよう。

#### 4. 身体の履歴の明確化

現代を生きる子どもたちは、「時間・空間・仲間」という「三間」を喪失している状態にあると言われている。中でも「時間」と「空間」に焦点をあてて見るとき、現代の子どもたちにとって、真に子どもだけの時間の流れを可能にするような空間があるのか、という問いかけがなされているのが現代であると言えよう。というのも道路、河川、雑木林、原っぱなどのような昔の子どもたちの周囲に当たり前のものとして存在し、子どもたちの遊び空間として位置づいていた自然環境が、高度経済成長にともない、大人達の手によって人工的な「公園」や「河川」等に置き換えられたり、また車優先の社会へと変化することで、子どもたちが遊びに没頭できる「空間」も「時間」も消失していると捉えられるからである。このことは、いわゆる「遊ぶ」ことを目的とした空間についても言及することが可能であろう。それは、いわゆるテーマ・パークという「空間」やテレビ・ゲームという「仮想空間」も、結局は第三者によって構成された世界を辿ることで成立する「空間」であり、また第三者の思考した「空間」を消費することで「楽しみ」が与えられている「遊び」である。それ故、それらは常に「終点」を持つのであり、道路で遊ぶ子ども達が、車が通行することで遊びを途切れ途切れにせざるを得ないのと同様に、子ども達の遊びを不連続なものにしている。一方、自然環境がもたらす遊びの空間は、子ども達が創造の世界にある限り連続性を持っており、それは「消費」し尽くすことのできない「空間」であると言えるであろう。あえて付け加えるならば、連続性を断つことができるのは、日没という自然の摂理のみである。

こうした現代的状況を視野に入れつつ、前節で見てきた桑子の「身体の配置」と「空間の履歴」の概念を敷衍して考えるとすれば、生物学的な生を受けた「ヒト」としてのわれわれの身体が、成長とともに「人間化」するプロセスにおいて、「人間は環境のなかでいろいろな事物やひとびとと関係をむすびながら人生を送る」（感性の哲学、p.191）ことが必要条件となる。またその「人間化」のプロセスをある時点で区切ったとすれば、そこにおけるわれわれの「身体」は、それまでの様々な「空間の履歴」を通過することで形成されたのであり、その「身体」は、いわばそれまでの事物との相互関係という横断的軸と時間的経過という縦断的軸がおりなす「履歴」を、具現化していることになると言えるのではないだろうか。しかもその「身体」は、ひとりひとり異なった「空間の履歴」を持つことから、「身体の履歴」も一人として同じ相貌を持つとは言えないことになる。

また桑子は、行為する人間の置かれた状況は一回的であり、普遍化をゆるさないものを含んでいるが、カントの立場では、行為の善さをどんな状況性をも超越した普遍的道德法則に従うことで普遍的に遂行しようとするものであると述べている。しかしながら朱熹は、行為する人間が一回的な状況においてもっとも適切な行為を導くよう、多様に解釈できる能力を、そしてその中から選択し決断する能力を要求していると解釈する（気相の哲学、pp.134 - 135）。

こうした桑子の前提にたって「身体の履歴」について考察を続けるとき、以下の桑子の文章が参考になろう。

何かを行為することを選択し、かつ同じタイプの行為を反復的に選択することによって、つまり習慣づけによって、わたしたちは、より同じタイプの行為をする性格ないし性向を獲得します。（気相の哲学、p.143）

「配置と履歴の感性論」の立場から風景と人間の関係を捉えるということである。この立場では、人間と自然、人間と環境を切り離すことのできないものとし、同時に、人間を、自然や環境に対して行為する存在とする。行為が配置と履歴というキーワードと結びついているのである。（新しい哲学への冒険（上）、p.42）

いわゆるカントの普遍的道徳法則の立場にたった視点からではなく、桑子が述べるような「人間と自然」、あるいは「人間と環境」において行為が行われるという朱熹の立場からするならば、一人一人異なった「空間の履歴」によって培われた「身体」は、それ故にまたある同一の状況におかれようとも、一人一人独自の「行為」を為すであろうと予測される。すなわち自分の身体をある「状況」に置いて見たとき、そこでは、その「状況」に対して何らかの判断を行い、それによって「行為」を為す自分が存在するはずである。これらのことからするならば、その「行為」を為すにあたって何を欲求したかを振り返ることで、自らの身体からみた世界と自らの身体を持つ「価値判断」について語ることが可能となるであろうし、それらを連続的に繋げることによって、現在における自らの身体思想の練成過程を記述することも可能になると考えられる。いずれにしてもその素材となるのが「身体の履歴」であると言えよう。

上記の解釈を大脳生理学の視点から若干裏付けるならば、以下の文章が参考になろう。

澤口によれば、幼少期の脳皮質の変容は、生誕前後にニューロンの大量死から起こるとして、その経過を以下のように述べている。

大規模な細胞死が起こる時期の後半からその後にかけて、シナプスが豊富かつ急速に形成される。このとき、生き残ったニューロンも樹状突起をのばして豊かに発達し、ネットワークを広げていく。そして、シナプスはその後も生後数歳になるまで増え続けたあと、急速に減少して15歳ころには大人の密度に近づいてしまう。(澤口、p.72)

澤口は、こうした「互いに大きくあるいは微妙に異なるものを多量につくっておいて、その後、適当なものを選択する」(澤口、p.73)という神経回路の形成は、我々がどのような環境に生まれ出るかわからないだけに非常に有効な戦略であり、この可塑性の大きさをいかに利用して環境に適応していくかが、我々に与えられた課題であると述べている。まさにこのプロセスは、個々人の「身体の配置」と「空間の履歴」が身体においてどのように蓄積されていくかを示すものであると考えられる。

今一度、桑子の論に戻ろう。

「配置と履歴の感性論」から、人間を捉えるならば、人間は、自分の生きる空間の相貌としての風景と自己とを結びながら、自己の履歴を形成する存在である。自己の履歴は、空間のもつ履歴と不可分な関係にある。空間と自己の履歴とのかかわりで自己を理解することから、自分の姿が現れてくる。(新しい哲学への冒険(上)、p.43)

この言説から言えることは、身体に焦点を当てることによって、すなわち身体の履歴を考察することが、自己理解、特に身体に対する価値形成を探るための一助となることを示唆するものと考えられる。

また桑子は「思考のドメスティケーション (domestication)」が現代において求められているという。この「思考のドメスティケーション」とは、「普遍的な問いを抽象的に問うのではなく、世界内の自己の配置から問うことである」(環境の哲学、p.162)とし、さらに以下のように付け加えている。

自己の配置とは、いま、ここであり、そして、いま、ここにあるのが、この身体としてのわたしである以上、「内化」という言い方を採用しても、このときの「内」とはけっして心の内面性を意味しない。むしろ部屋であり、家であり、国であることによって、身体の空間的存在から問いを發すること、この身体が存在する部屋、家、国といった空間から問うことにほかならない。(環境の哲学、p.162)



「身体の履歴」もまた、我々が子ども時代に過ごした「遊びの空間」に対して、一人の個人というローカルティにおいて眺め観察しそして考察することから始まるのである。そしてそれを「わたし」という個人の言葉をもってどう表現することができるかが次なる課題となるであろう。「遊び空間」をも自らの身体との連続性において捉え、またそうした空間が我々に対してどんな影響を与えていたのだろうか。

次節では、筆者自らの身体の履歴、例えば、誕生から澤口の述べる15歳前後までの遊び空間とそれに係わる人間関係についての記憶をたどることから、自らが今日身体に対してどのような考えを抱くようになったのかについて「身体の履歴」を通して記述してみることにする。

## 5. 「身体の履歴」の検証

次ページの表は、筆者の「身体の履歴」をまとめたものである。

まず、人間関係として、年齢とその時における家族構成（内的関係）と家族以外の人間関係（外的関係）の別、次に遊び空間と労働空間それぞれにおける屋内、屋外の別とそこにおける主活動内容について記載した。これらを文章に置き換えると以下ようになる。

まず特筆すべきことは、富山という積雪がある地方で生まれたこともあり、2才からスキーを始めたことであろう。これが現在に至る筆者自身の「身体の履歴」の基礎部分をなしている。というのも、小学校低学年時代までは、住居が黒部川に近いこともあり、その堤防をスロープとしてほとんど直滑降で滑り、同級生あるいは年上の男同士（スキーだけでなく全ての遊びが、こうした人間関係であった）で、誰がどれだけ遠くまで真っ直ぐに滑ることができるかを競った。休日には父にスキー場へ連れて行ってもらい、特に指導を受けるわけでもなく、一人で滑ることが多かった。小学校5年の時に、町内のスキースクールがあり、そこで特別班（競技選手を目指すグループ）に選出された。この当時の特別班の練習方法は、競技用のポールをくぐり抜けて100m程滑り降りてはまた自分の足で上り、また滑るというパターンを何度も繰り返すものであった。滑りは15秒たらず、上るのには15分以上かかった記憶がある。しかしながら、私より上手くない友達は、リフトを使って何回もそのポール練習の脇のゲレンデを楽しそうに滑っていたのである。そんな友達を見つ斜面上りながら考えたことは「自分は何でこんなつらいことをやっているのだろうか」ということであった。本来、スキーは楽しむべきものであり、このポール練習は「苦業」以外の何ものでもないと感じられたのである。

このように考えた、筆者の原体験とも言えることは、家が農家で米を作っていたため、土、日曜でも農繁期には刈り入れ等の手伝いをさせられたり、風呂を沸かす燃料も、近くの黒部川から流木をひろってきて、夏の暑い時期にまき割をして冬に備える父の作業を手伝ったりしたこと。さらには、人糞を父と天秤棒でかつぎ、畑まで何回も往復する作業等々を手伝わされたことがあげられるであろう。すなわち、辛い「労働」が一方であり、それらに対して遊びやスポーツはそうした労働を忘れさせる楽しみの一つだったのである。

「自分は何でこんなつらいことをやっているのだろうか」というスキーの話に戻すならば、スキーに楽しさを求めていたにもかかわらず、選手として辛いトレーニングをすることは、筆者にとっていわば労働のような辛さが、またそこにあったのである。

また、子ども期以降の身体の連続性を視点とし、「身体の履歴」について述べるならば、メンコや釘さしは、連日行くと肩が痛くなるほどのものであったし、これに川原での空き瓶にめがけて石を投げたことを付け加えるならば「投能力」が、さらに相撲では足腰の強さが、段差がついた畦道での前方転回等々、後の野球や器械体操等の基礎能力をつけるだけの「遊び」がなされていることも読みとれる。

表: 身体の履歴

年 齢	空 間									
	遊び空間 家族構成	屋内	屋外	家族外構成	屋内	屋外	労働空間 家族構成	屋内	屋外	
	(内的関係)	主活動内容	主活動内容	(外的関係)	主活動内容	主活動内容	(内的関係)	主活動内容	主活動内容	
0歳	祖父、祖母、父、母、姉、叔父(4)、叔母(2)									
	春			春			春			
	夏			夏			夏			
	秋			秋			秋			
2歳	祖父、祖母、父、母、姉、叔父(3)、叔母(2)			曾祖母						
	春			春			春			
	夏		海水浴(母:海水浴場)	夏			夏			
	秋			秋			秋			
4歳	祖父、祖母、父、母、姉、叔父(3)、叔母(2)									
	春			春			春			
	夏		海水浴(母:海水浴場)	夏			夏			
	秋			秋			秋			
5歳	祖父、祖母、父、母、姉、叔父(2)、叔母(2)									
	春			春		ビーボール・釘さし(通路)、野球(神社)	春			
	夏		海水浴(母:海水浴場)	夏		水泳(川)、ビーボール・釘さし(通路)、野球(神社)	夏			
	秋			秋		ビーボール・釘さし(通路)、野球(神社)	秋			
7歳	祖父、祖母、父、母、姉、叔父、叔母(2)			同年齢及びそれ以上(男のみ)						
	春			春		ビーボール・釘さし(通路)、野球(神社)	春			
	夏		海水浴(母:海水浴場)	夏		水泳(川)、ビーボール・釘さし(通路)、野球(神社)	夏			
	秋			秋		ビーボール・釘さし(通路)、野球(神社)	秋			
10歳	祖父、祖母、父、母、姉、叔父、叔母			同年齢及びそれ以上(男のみ)					祖母、父	
	春			春		ビーボール・釘さし(通路)、野球(神社)	春		田植え	
	夏		海水浴(母:海水浴場)	夏		水泳(川)、ビーボール・釘さし(通路)、野球(神社)	夏		薪拾い(父:川原)	
	秋			秋		体操(田)、ビーボール・釘さし(通路)、野球(田・神社)	秋		稲刈り、脱穀	
12歳	祖父、祖母、父、母、姉、叔母			同年齢及びそれ以上(男のみ)					祖母、父	
	春			春		ビーボール・釘さし(通路)	春		田植え	
	夏		海水浴(母:海水浴場)	夏		水泳(川)、ビーボール・釘さし(通路)、野球(神社)	夏		薪拾い(父:川原)	
	秋			秋		体操(田)、ビーボール・釘さし(通路)、野球(田・神社)	秋		稲刈り、脱穀	
14歳	祖父、祖母、父、母、姉、叔母(2)			部活動(指導者有)					祖母、父	
	春			春		野球部	春		田植え	
	夏			夏		野球部	夏		薪拾い(父:川原)	
	秋			秋		野球部	秋		稲刈り、脱穀	
16歳	祖母、父、母、姉			部活動(指導者無)					祖母、父	
	春			春		バレー部	春			
	夏			夏		バレー部	夏			
	秋			秋		バレー部	秋		稲刈り、脱穀	
16歳	祖母、父、母、姉			部活動(指導者無)					祖母、父	
	冬		スキー(父:スキー場)	冬		バレー部、競技スキー(スキー場)	冬			

以上を総括するならば、こうした「身体の履歴」が現在の筆者の根本的考え方、「スポーツは、それをやった結果何かを得ることができるといふようなものではなく、真にその瞬間を楽しみ遊ぶものである」ということを考える原点となっていると考えられる。換言するならば、労働と遊びの明確な区別があったことによって、「苦」と「快」のメリハリが否応無く身体に刻み付けられ、「苦」からの解放を求めて遊び（スポーツ）に「快」を求めること、これがこの「原点」への解釈であると思われる。

次に「空間」について記述してみることにする。遊び及び労働における主たる空間は、田畑、川（堤防）、通路、玄関、座敷、海水浴場、スキー場である。これらは季節的な使い分けがなされていた。春から夏にかけては、田畑は作物が育成されるため、労働空間であるが、収穫がなされた秋以降は、遊びの空間となる。また冬においては積雪があるため川の堤防の斜面が特設のスキー空間となる。さらに近隣は農家が多いことと屋敷が広いことから、積雪時の遊び空間は、玄関や座敷（10畳以上）であった。なかでも特筆すべきことは、通路の存在である。この通路はある民家から道路にでるための通路であったが、その民家の南側に位置しており、積雪の後はどこよりも早く雪が溶ける空間であった。また地面は堅く、適当なスロープがあったため、釘さしやビー玉をするには格好の場所であった。さらにはこの民家は集落の中心に位置しており、ここに行けばいつも誰かが何らかの遊びをしている溜まり場としての「空間」であった。聞くところに寄れば、この「空間」は、何世代も前から続く子ども達の遊び場であったと言う。

これらのことより、「労働空間」と「遊び空間」は表裏一体の関係にあったことがわかる。薪を拾った夏の川原が一方でスキーや水泳をする空間であり、稲刈りを手伝わされた田んぼが、野球や体操のフィールドへと季節によって転換するのである。このように「労働空間」と「遊び空間」は日常生活圏が中心であるだけに、渾然一体としたものであったわけであるが、前述したように、身体が「苦」を与えられる時と「快」を求める時では、その同じ風景が明らかに異なって感じられたであろう。また「通路」は、日常から抜け出すための特殊な「空間」であり、遊びに没頭することのできる、いわば唯一時間の途切れを感じさせない「空間」であった。

筆者の「身体の履歴」は、昭和30年代の日本であるならば、どこにでもある風景なのかもしれない。また「苦」からの解放として「快」を求めることも、特筆するにあたらぬ「身体の履歴」なのかもしれない。しかしながら、ここに記述した風景を想像するとき、そこから今日におけるすべての「行為」を選択する価値判断が、ここを原点としその延長線上にあることは、疑いえないであろう。それは川原を夏の暑さをしのぐ単なる水遊びの場と見、田んぼの稲の実りを食欲と結びつけるだけでなく、今見える風景の背後にあるであろう「労働」の「苦」が「空間」から読みとれるという感覚は、こうした感覚を欠いた現代の子どもとの対比からも、浮き彫りにされるのではないかと考えられる。

## 6. 学校体育における指導と個人の「身体の履歴」

ここまで桑子の論を拠り所として「身体の配置」あるいは「空間の履歴」という概念について検討を加えることから、新たな「身体の履歴」という概念について明らかにした。次にその「身体の履歴」の事例として筆者自らの身体の個人史を描くことで、身体がどのような環境的影響を受けつつ身体に対する価値形成をなしてきたのかについて見てきたわけであるが、最後に、身体を主たる対象とする学校体育において、これまで見たきたような「身体の履歴」を一人一人の児童・生徒について問うことが、指導するうえでどのような意義を持つのかについて述べて見ることにする。

そこで、まず学校における児童・生徒の個人理解の現状を知るために、一人一人の児童・生徒の記録として公的な位置付けがなされている指導要録をとりあげ、その内容と機能について再考するとと

もに、最近、評価の問題と関連して取り上げられているポートフォリオについて検討を加えることで、「身体の履歴」を問うことが、学校体育においてどのような意義を持つのかについて検討してみることにする。

まず指導要録について概観してみよう。

1948（昭和23）年、指導要録は個々の児童について、その発達の経過を継続的に記録しその指導上必要な原簿となるものとして、できるだけ客観的にしかも容易に記録されるように作られた。その後1955年の改訂では、教科の評価に「評定」欄を設定して総合評定を採用。1961年の改訂では、1958年の学習指導要領改訂にともなう「法的拘束化」に連動させ、用紙の規格を統一し、公簿としての性格を一層強めた。また1971年には「本籍」「健康の記録」欄など、プライバシー上人権問題にかかわり、指導や外部への証明として必須でないものは除外された。それ以降、1980年、1991年といずれも指導要領の改訂に伴った改訂がなされ、今回（2001年）の改訂に至っている。

具体的に、例えば今回改訂された小学校の指導要録に書き込まれる情報としては、以下のようなものがあげられる。

1. 児童の氏名、性別、生年月日及び現住所、2. 保護者の氏名及び現住所、3. 入学前の経歴、4. 入学・編入学等、5. 転入学、6. 転学・退学等、7. 卒業、8. 進学先、9. 学校名及び所在地、10. 校長氏名印、学級担任者氏名印という事実記録と、観点別学習状況及び評定、総合的な学習の時間の記録、特別活動の記録、行動の記録、総合所見及び指導上参考となる諸事項、からなっている。

以上のことから言えることは、ここで記録される事柄が、徹底して学校の教育活動に限定された情報であることである。1971年の改訂でプライバシーに関する事項が削除されて以来、児童・生徒に関する学校以外の情報は記録として残されていない。指導要録が外部に公表されることを前提とした資料であるだけに、こうした方向へと性格を変えていったのは、人権の問題からいっても当然の成り行きであったと言えよう。

しかしながら、今回の完全学校週5日制の下での新学習指導要領において強調される、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成するためには、学習指導要領を最低基準とし、その基礎・基本の確実な定着を前提とした、「個性重視」の教育がさらに必要とされている。ここで言う「個性重視」の教育を実践するためには、子ども一人一人に応じたきめ細かな教育が必要であることから、当然のことながら個に応じた指導、すなわち理解や習熟の程度に応じた指導、あるいは個別指導や繰り返し指導といったように、学ぶ児童・生徒一人一人の理解を前提としていることは誰の目にも明らかであろう。当然のことながら、この「児童・生徒一人一人の理解」という言葉は、言うは易く行うは難い事柄である。実際、指導要録等で教師は過去の学校活動における児童・生徒の素行や性格について情報を引き継いでいるものの、そこから得られるある一人の児童・生徒の情報量は、その個人が持つ総体からするならば、まさにほんのわずかなものでしかない。現状は、指導要録を参考にした指導というよりも、個人理解の前提は、実際に指導しつつ、かつその児童・生徒の情報を得るといった、いわば個人の理解と指導が同時進行されているのが実状であると言えよう。こうした指導における問題点は、その指導する事柄に対する児童・生徒のその場での反応のみが、即、一人一人の個人理解に直結してしまうことである。

本来、一人の人間がそこに存在するということは、誕生以来さまざまな成育、教育環境を経た連続性のなかにあるのであり、その連続性を把握してこそ、現時点における個人の理解、把握が可能となると考えらる。またそうした成長の連続性という流れをつかんでこそ、子どもがどこまで理解したかを確かめつつ学習活動の内容や速度を変えていくというような、「未来」へ向けた成長のための計画が

立案しうると考える。

もちろんこうしたことを教師個人の努力に求めるのは無謀であり、少人数教育という物理的状況等を変化させるとともに、教師が教育に全力を注ぐことのできる環境作りが必要条件であることは、ここに改めて述べるまでもないであろう。しかしながら、もしそうした環境が整備されたと仮定するとき、現状の指導要録のみでは、一人の児童・生徒を多角的に理解するには限界があると言えよう。

次に、「身体の履歴」と類似の特徴を持つと考えられるポートフォリオについて、若干の検討を加えて見ることにする。

ポートフォリオとは、もともと書類をいれて持ち運ぶ書類入れのことであり、ビジネス界では金融資産の多様な運用方法の総体という意味で使われるが、教育の分野では学習者がテーマを決めて探究する場合の収集物や記録、学習成果をまとめたファイルやノートのことであり、また評価方法を示すためにポートフォリオという用語が用いられている。

このポートフォリオを生みだす原型となったのは、ジョン・デューイやジャン・ピアジュに代表されるようないわゆる構成主義の研究に根ざしている。

構成主義的な学習についての仮定として、シャクリー (p.13) は以下のような事柄をあげている。

- ・ 児童は、環境との相互作用によって学ぶ。
- ・ 児童は、経験から意味を作り出すという基本的な要求を持っている。

(略)

- ・ 新しい考えは、児童が自分の経験したことを、以前に持っていた考えや経験と比較したときに生まれる。
- ・ 教師は、児童が何をすでに知り、理解しているかを把握し、今ある知識から新しい学習を構築しなくてはならない。
- ・ 児童は、大小のグループ化や個別化で、新しい考えや概念を探求し、検討し、討論し、学ぶことになる。

また小田 (p.21) は、デューイの思想について『短時間内』でなく『長時間内』のプロセスを『部分』ではなく『全体』を、『結果』よりも『プロセス』を評価する考え方は、デューイが出発点なのである」とまとめている。いずれにしても、「身体の履歴」としてこれまで述べてきた内容、例えば「配置」と「空間」という環境や人間関係との相互作用を提供する場を重視すること、あるいはそれらが歴史的軸を持つという点において共通すると言えよう。それゆえシャクリーが

ポートフォリオの中に見つけられるような質的な評価の結果は、子どもがいつ、どこで、どうやって、どんな学びを示したかについて、豊かで明確なイメージを与えます。それはまた、いつ、どこで、どうやって、どんな活動が将来行われるかを計画するための形成的なデータとなります。(B.D.シャクリー、p.9)

と述べるように、ポートフォリオは、収集物や記録、学習成果をまとめたファイルやノートという「現物」で具現化させるのであり、一方「身体の履歴」は、まさに現存する各自の身体とその身体に対する価値形成過程の成果を、「身体」とその行為において具現化するのである。そしてこれらを利用することで、一人一人の児童・生徒の理解と、未来に向けた学習内容の選択や指導方法の個別化を可能にすると考えられる。

結局のところポートフォリオは、ある単元についての記録であるという点で、短期間の思考プロセスのみを具体化するものである。これがさらに多くの単元に利用され、それらが蓄積されていったとするならば、一人一人がある物事を捉える視点の根拠を示すものになる可能性を持つと予想される。

「身体の履歴」についても、それを素材として、自らの身体の成長過程を「振り返る」ことをその主目的とするわけであるが、その蓄積のためには様々な方法があると考えられる。例えば自らの記憶があやしい年代は、主たる養育者によって、どのような人間関係（家族や友人等）の中で、どんな遊びや労働（手伝い）をしたのかについて語ってもらうことで、指導者の個人理解が深まるであろうし、またそれ以降においては、自ら自分の過去を「振り返る」ことで、指導者にその身体の成長過程という情報を与えるとともに、自らの行為に対する価値判断についてもまた「振り返る」ことを可能とするであろう。

いずれにしても、「身体の履歴」として記述されるのは、過去のある年齢における遊びや労働（手伝い）やそれらを行った一時の「空間」という「点」である。しかしながら、それらの「点」を結ぶことによって「線」となり、さらに他者とのつながりや空間とのつながりを想起することによって、「身体の履歴」は「面」や「立体」へと拡大するであろう。

こうした情報を得た上で実践される学校体育を想定するとき、そこでは、児童・生徒の一つのつまずきについて考える指導者サイドに対する手立てを与えるとともに、児童・生徒自身も自らが育ってきた身体の歴史を再確認することで、自分自身の身体を知る手がかりとなるとともに、自らの身体に対する価値意識を知るための材料となるであろう。そしてこうした授業における教師と児童・生徒の相互作用によって、まさに「個に応じた」授業実践へとつながる糸口となるのではないだろうか。

#### 引用・参考文献一覧

- 1) 桑子敏雄 (1996) : 気相の哲学、新曜社
- 2) 桑子敏雄 (1998) : 空間と身体－新しい哲学への出発－、東信堂
- 3) 桑子敏雄 (1999) : 西行の風景、日本放送出版協会
- 4) 桑子敏雄 (1999) : 環境の哲学－日本の思想を現代に活かす－、講談社
- 5) 桑子敏雄 (2001) : 新しい哲学への冒険（上）－理想を語ること－、日本放送出版協会
- 6) 桑子敏雄 (2001) : 新しい哲学への冒険（下）－決断すること－、日本放送出版協会
- 7) 桑子敏雄 (2001) : 感性の哲学、日本放送出版協会
- 8) 小田勝己 (1999) : 総合的な学習に適したポートフォリオ学習と評価、学事出版
- 9) 佐藤臣彦 (1993) : 身体教育を哲学する－体育哲学序説－、北樹出版
- 10) シャクリー、B.D.(2001) : ポートフォリオをデザインする－教育評価への新しい挑戦－、田中耕治監訳、ミネルヴァ書房
- 11) 澤口俊之 (1999) : 幼児教育と脳、文藝春秋